

研 究 結 果 報 告 書

所属 魯東大学区域国別学院

役職 専任講師

氏名 朱 紅軍

【研究のテーマ】

東アジアにおける赤山明神の交渉研究

【研究結果】

本研究では、まず『入唐求法巡礼行記』に立ち返り、史料を精査することによって、赤山明神の本来の姿を明らかにすることを試みた。『行記』の中には、「赤山明神」といった呼称は直接登場しないが、「當處神」「登州諸山島神」「赤山の龍宮」などの記述が確認される。桑島に祀られていた「當處神」は、その地の海域を守護する地方神であり、龍王として信仰されていた可能性が高い。また、「登州諸山島神」は「冥神（海の神）」と和していないことを理由に赤山南方の海上で祀られたとされるが、この神もまた海の神、すなわち航海安全を祈る存在であったと考えられる。さらに、赤山の老僧によれば、当地には古くから多くの龍宮が存在していたという伝承もあり、赤山周辺では龍王信仰が盛んであったことがうかがえる。

こうした背景を踏まえた上で、中国の赤山法華院、日本の赤山禪院、韓国の莞島法華院について、文献資料と考古学的資料の両面から調査・分析を行った。赤山法華院は在唐新羅人によって建立された寺院とされ、入唐僧円仁との関連も見られるが、現在までに発見された記録や出土資料は非常に限られている。その後、円仁は赤山明神を日本に勧請し、その弟子・安恵が赤山禪院を建立した。現在でも、比叡山西側の赤山禪院や延暦寺横川の赤山祠において赤山明神は祀られており、その信仰は日本において継承されている。一方、韓国の莞島や済州島に所在する法華院については、赤山法華院や赤山明神との直接的な関係を裏付ける考古学的証拠や文献資料は確認されておらず、赤山信仰との関連性には疑問が残る。

以上の考察を通じて、赤山明神は中国山東半島沿岸における龍王信仰を起源とし、それが円仁を介して日本へと広がり、神仏習合的な形で信仰が定着していった存在であることが明らかとなった。本研究は、赤山明神を東アジア的な文脈の中で再定位するための基礎的作業を意図している。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

朱紅軍. 日本承和度遣唐使の航海信仰研究, 2024年度東アジア文化交渉大会, 2024年5月11日, 日本・福井

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

1. 朱紅軍. 東アジアにおける赤山明神に関する遺跡地, 『東アジア文化交渉研究』(18号), 2025年, 195-218頁

2. 朱紅軍. 赤山明神の起源と神格, 『東アジア文化交渉研究』 (17号), 2024年, 219-229頁

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)